

## 日本のハム第1号の話題・他

J1SXA/池

JOAKが実験送信を開局したのは、1925年(大正14年)3月1日だが、その前年の、1924年(大正13年)5月、ラジオ放送聴取のための技術啓蒙雑誌として「無線と実験」が創刊された、当時の発行元は、伊藤賢治氏が創立した「無線実験社」だが、ラジオに関するわが国最初の単行本として、「無線の知識」と「ラジオ組立法」を発行し、「無線と実験」に続き、「ラジオと自作」を創刊している、この伊藤賢治氏はどんな人物かというと、1915年(大正4年)勤務先の「いわしや岩本器械店」のレントゲン部長として渡米、スタンフォード大学でエタムス教授の指導のもとに電気生理学を学び、5月、シカゴ市ビクター・エレクトリック・コーポレーションでレントゲン及び高周波電気治療器の製作技術を習得。

1917年(大正6年)本郷赤門前に電子医療の研究所を創立して、所長兼技術者となり、わが国最初の交流式レントゲン製造に成功する。

米国でラジオ放送が開始された、1922年(大正11年)欧米漫遊の旅に出発し、米国RCA、ウェスチングハウスにて技術を習得、帰国後、無線機並びにラジオ受信器の作成をし、わが国のラジオ放送の開設に尽力した凄い技術屋さんだ。

1926年(大正15年)3月、任意団体としてJARL(日本アマチュア無線連盟)の設立を決定、初代総裁は、草間勘吉氏。

1926年(大正15年)6月12日、英文の、JARL設立宣言文が短波で、世界中のアマチュア局に打電された、

We have the honor of infoming that we amateurs in Japan have organized today the Japanese Amateur Radio League,QST to all.

JARL創立時メンバーは37名で、JARL創立37師と呼ばれる、草間貫吉、森本重武、笠原功一、梶井健一、井深大、島茂雄、仙波猛、有坂磐雄氏等の錚々たる人達がいる。

1926年(大正15年)、逓信省(現、総務省)は、ARRLの機関紙QST8月号でJARLが設立されたことを知り驚愕したようだ。

わが国で初の個人の短波私設無線電信無線電話実験局が許可されたのは、1927年(昭和2年)9月で、許可されたのは、草間貫吉氏で、コールサインは、JXAXで、その後、3KK、J3CB、JA3HAMとなった。(同時に許可されたのは、草間氏の他7名だった)

2016年には、JARL創立90周年記念が行われた、永い歴史を刻んだものだ。

日本のYLハム第1号は、杉田千代乃さん(結婚後は鈴木性に)だ、まだ、OMたちも少ない時代、兄の杉田倭夫氏/J1DNが、早逝(サイレントキー第1号)、仲間達が、妹の、千代乃さんにハムになれと強引に勧め、最初は断っていたようだが、CWも無線工学も、一流の連中が引き受けて特訓したようだ、後の、J2IXの最初のコールサインは、兄のコールサインを逓信省(当時)の粋な計らいで継承したJ1DN、開局は、1933年(昭和8年)10月だ、後に、コールサインは、J2IXに変わり、戦後復活した時は、JH1WIXで開局している。



J2IXのシャックには、兄の遺影が飾られている。



JH1WIXは、戦後復帰した時のコールサイン

1950年(昭和25年)5月に電波法が公布されるまで、アマチュア無線局の名称は無かった、全て私設無線電信、無線電話実験局として登録されていた

戦後、アマチュア無線技士国家試験の第1回の実施は、1951年(昭和26年)6月で、合格者は第1級47名、第2級59名だったようだ。

1956年(昭和31年)1月22日、JA1AHS/根岸秀忠氏は50MHzでVK4NG(オーストラリア)と交信した、超短波による初の海外との交信であった。

同年3月24日には、JA6FR/大島保男氏が50MHzでLU3EX(アルゼンチン)と交信、18,240kmの世界DX記録を作った。

1959(昭和34年)4月には、初の電話級と電信級の国家試験が施行され、5月には、盲人ハム第1号が誕生、コールサインは、JA4VB、2文字のOMさんだ。

1961年(昭和36年)4月10日の政令で、第2級局に全バンド、電信・電話級局に14MHz

以外のバンドの使用が拡大承認された。(それまでは、14MHz帯は第1級局のみに許可されていた)

1978年(昭和53年)2月24日、JH6TEW/田尻憲輝氏がダーウインのVK8GBと144MHzにおける日本とオーストラリア間の初交信に成功した。

1981年(昭和56年)1月、50.240MHzSSBモバイルグループの第1回アイボールミーティングが行われ、連絡周波数として、50.240MHzを設定し、ここに、240グループがスタートしたのだ、そして年末の12月には、京王プラザホテルで第1回忘年会が開催され、出席者に、「TWO-FORTY誌」創刊号が配布された。

1982年(昭和57年)3月、わが国初のレピータ局JR1WA(430MHz帯)が開設され、10月には、聴覚障害者ハム第1号が誕生。

1982年(昭和57年)4月22日郵政省告示第280号により「アマチュア局が動作することを許される周波数帯」が全部改正され、5月1日から、WARCバンドが解放された。

240グループの、第1回モバイルホイップによる電波伝播実験は、1984年(昭和59年)5月最終日曜日に行われ、以後毎年続いている。

そして、1986年(昭和61年)には、第19回関東モバイルハム同好会の幹事として、河口湖大会をお世話した、240グループ第1回目の幹事だ、5/8λ ANT車を並べ威容を誇示。

1989年(平成元年)に、電信級は第3級に、電話級は第4級に変更になった。

電波利用料制度が始まったのは、1993年(平成5年)4月だ、6月には、50MHz帯で最大空中線電力が500Wまで可能となった。

施行規則の改正により、ゲスト・オペレーター制度が導入され、他局を訪問して運用が可能になったのは、1997年(平成9年)の事だ。

2001年(平成13年)電波法改正で、第1級は、最大は明記されないものの1KW、第2級は200W、第3級は50W(18MHz、8MHz以下)、第4級は10W(21~30MHz、8MHz以下)及び20W(30MHz以上)となった。

また、電波法関係審査基準(総務省訓令67号)の一部が改正され、「インターネットを利用した遠隔操作」の条件等が加えられた(施行期日は2004年1月13日)。

2004年(平成16年)5月3日、国際電気通信連合(ITU)は、近年使用する機会が多い電子メールアドレスで使われる@を、モールス符号に新たに加えた、符号は「・ー・ー・ー・」。

2009年(平成21年)3月、無線局手続規則、無線設備規則、電波法施行規則等の改正が官報により告示され、3月30日から7MHzの拡大、135KHzの割当などが決定された、また、電波法施行規則の改正で、7月1日から法およびこれに基づく命令の収録(電波法令集またはその抄録)の備え付け義務が無くなった。

2011年(平成23年)4月13日付けで、第1級・第2級アマチュア無線技士の国家試験から、電気通信術の実技試験が廃止される事となった(平成23年10月1日施行)、これで、1アマが楽々取れると喜んだのは、CW嫌いのOMさん達だ、矢張り、欧文60文字/分、和文50文字/分のCW試験が大ネックだったので、当然だ、逆に、難関のCW試験をクリアして1アマになったOMさん達からは、操作範囲等はそのままで良いが、名称を、特1級とか何とかにして区分しろとの不平・不満が多くあった。…以上、JARLの無線年表等と240グループの年表を眺めて、私が、特に気になったニュースを勝手に取り上げて見ました。